

廊下を歩きながらネクタイを緩め、ボタンを外し、汗だくの半袖を翻す。太田の肩にかけられたタオルは彼の汗を含んで、むんとした匂いを放っている。

闇夜になるまで交渉を続け、それでも強行な手段をとろうとした環境テロ団体のレイバーを片づけて、今ようやく埋め立て地に帰ってきた所なのだ。蒸し暑い東京の夜。クーラーがついていないイングラムの中は、自身が発する熱も考えると、搭乗者は出勤の度にサウナに入っているようなものだ、と言ったら大袈裟かもしれない。

← **イングラムの中にはクーラーがついていません。**

サンデーコミックス3巻12Pで太田さんが「イングラムの中で、エアコンきかせてた方が楽だぜ。」と言っている事からクーラーはついていません。すみません。

射精した後の気だるさと、出勤した時の疲れが重なって、考えるよりも、瞼が閉じてゆく心地よさに身を任せて、太田は目を閉じた。次に目を開けたら、またいつもと通りの暑い日が始まるのだろうか。

← **いつもと通りの↓いつも通りの**
という誤字です。すみません。

■ どうもこんにちは、サークル真鱈目研の真鱈です。発行後に誤設定・誤字を発見しました。

訂正ペーパーという形での訂正ですみません。2009年夏コミ用に、訂正箇所を直して再版をするかもしれませんので、訂正版の

「午前二時の遠吠え」を手元に置きたいという方は、左記メールアドレスまで御連絡ください。

※迷惑メール対策のため、題名は日本語でお願いします。
meganekko@shirayuki.sain.net

誤字訂正ペーパー
「午前二時の遠吠え」

<http://shirayuki.sain.net/~meganekko/>